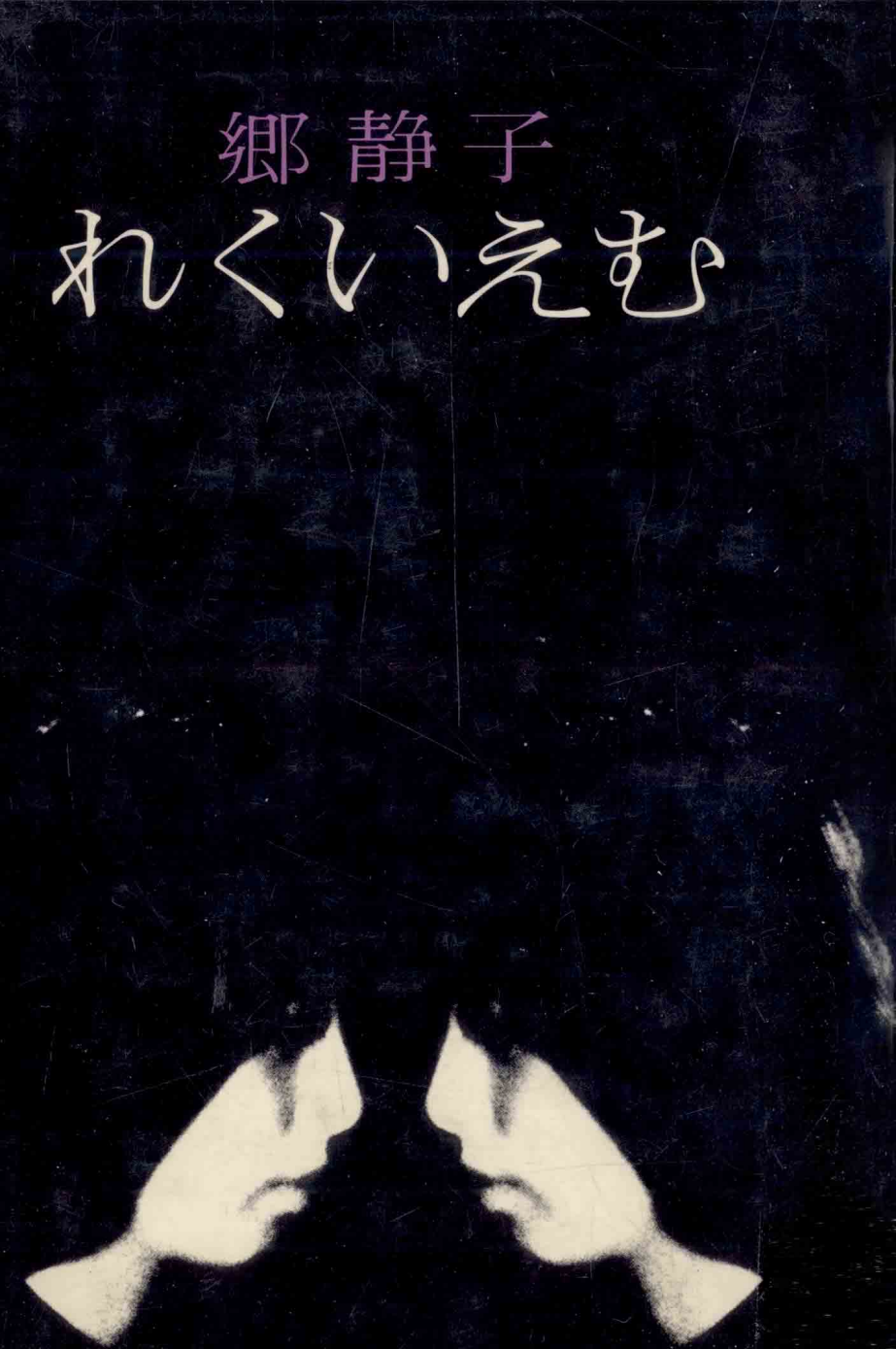
郷静子

れくいえむ



郷静子

れくいえむ

藝春秋

著者略歴
昭和4年4月20日横浜市に生る
鶴見高等女学校卒業　日本文学学校中退
〈現住所〉　横浜市磯子区森5－2－26

れくいえむ

昭和四十八年二月二十五日　第一刷
昭和四十八年四月一日　第四刷

定価　五三〇円

著者　郷　静子

発行者　樫原雅春

発行所　株式会社　文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町三
電話東京二六五－一二一一
郵便番号一〇二

印刷　凸版印刷
製本　中島製本

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

© Shizuko Gō 1973　Printed in Japan

0093-302690-7384

れ
く
い
え
む

装幀　粟屋　充

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

眼を開くと、闇はいっそう深かった。私が目覚めるときはいつも夜だ、と節子は思った。湿気を含んだ冷ややかな空気が、頬や手足の皮膚に触れる。眼で見る世界が消えてしまうと、代りに皮膚が目覚めるのであろうか。右手をのばして、そこに濡れた土肌を探り当てると、指先にもまた小さな眼がついていて、壁を支える柱や梁の一本一本が、はっきりと見えるのだった。壁は冷たくて、意外にもろい。爪を立てて掻いていくと、限りもなく崩れていく感じであった。

しかし、この壕舎を掘るときは、父も兄も大げさに疲れた、疲れたといったのだ。

防空壕の中には何を入れるの。お布団と非常食糧と救急箱。俺の汽車ポッポを忘れるな

よ。こわれないように、一番奥に、昔おじいちゃんが使っていた皮のトランクに入れてな。ばか、防空壕は家族みんなが身体だけ入ればいいんだ。

キャラメルの空箱を墨汁で黒くぬり糸でつなげて、白いクレパスで、べんけいごう、一ねん一くみ、大いずみはじめと苦心して書いた兄に、ついさっきも、節子は逢った。肇は赤い頬をふくらませ、口をとがらせてクレパスを握っている一年坊主なのに、節子はすきようもなく乱れた髪に虱をたからせて、身動きも出来ずに横たわっている現在の姿だった。こどもの兄の無関心なよそよそしさに、夢の中で、絶句して涙を流した。

節子、水、くれ。笑った歯の白さと、首にまいたタオルの白さが、闇に鮮やかに浮かぶ。壕の穴から掘り出した土は庭土の上に平均に盛られた。野菜畠になるはずであった。この辺は関東大震災のあとで埋立てた土地だからねえ。ろくな南瓜もならないかもしれないよ。台所の窓から、姉さまかぶりの母の声がする。スコップや鍬やバケツや板切れや金槌や釘箱などが狭い庭に勝手な方向にころがっていた。縁側に腰をおろして地下足袋を脱いだ肇の足は、恥かしい程白く、そのくせ指の甲には長い毛が生えていた。おにいちゃんの足、へんな足。指はちゃんと五本ある筈だぞ。だって毛がはえているんだもの。人間にはどこにも産毛ってものがあるんだ。これが！　すごい産毛！

さつまいもの湯気の中で、笑いあった。あたたかい晩秋の日曜日。あのとき、本当に防空壕に身をひそめる時があろうなどとは、思いもしなかったのである。

眼も鼻も口も熱い。吐く息も燃えるようだ。また熱が高くなってきたのだろうか。息苦しさはじっと動かずにいれば耐えられない程ではなかった。しかし、渇きの方はとても我慢できないと思われた。節子は、水を呑むためにはどれほどの苦痛を忍ぶ必要があるかを思った。水筒はかなりまえから空になっている。節子はすでに何度も渇きのために目覚めていた。しかし水を飲むために費さねばならない労苦を思って、そのたびに渇きの方を忍んだのだ。壕舎の出入口から台所跡の水道までは、ほんの二、三米の距離しかない。だが、半地下の壕舎から地上に出るまでには急な階段を五段昇らねばならなかった。俯伏せになればまた激しい咳がおそうだろう。事実、喀血とそれにつづくはげしい咳で呼吸困難に陥り、節子はすでに何度も意識を失っていたのである。

指をしゃぶろう。幼い子どものするように。多分、少しは口のなかにうるおうものがある筈だ。どの指をしゃぶろう。小指が一番甘いかもしれないが、可哀そうな気もする。そうだ。人さし指にしよう。人さし指はおかあさん指、と子どもの頃に教えられたではないか。

おかあさん。

指を口に、眼を閉じた節子の頬に、かげのようなほほえみが浮かぶ。親子四人身体だけ入ればよいと父のいった壕の中に、母はひそかに小さな風呂敷包みをしまいこんでいた。りんどうの花の色に似た濃い紫地にえんじと白の小さな井桁のとんだ銘仙の反物。一匹。いつ、どんな風にしてそれを手に入れたのか、節子は知らない。節ちゃんにいいものみせてあげよう。母の秘密めかした笑いに誘われて、節子もあたりを何となくはばかるような気持になった。これはね。一匹あるのよ。二反分。節ちゃんが女学校を卒業するとき、ちょうどいいでしょ。モンペと上着と、羽織ができるの。でも、もしかしたら、肇のお嫁さんとおそろいの着物をつくれるようになるかもしれないわね。女学生は新しい制服をつくることができず、モンペと長袖の上衣なら何を着てもよいことになっていたが、まだ毎日の生活は戦前の習慣に近いものがのこっている頃であった。女学生の娘は何年か後には卒業し、専門学校に通っている息子は卒業したら結婚するであろうと、母親は考えていた。

その反物は、母が死んだとき、母を焼く燃料に変った。

ほほえみは頬に刻みこまれたまま、涙がその上を落ちた。そして、涙が消えないうちに、新しいほほえみが重なる。おかあさん、節子ももうすぐ行きますよ。おとうさんもおにい

ちゃんも、そこにいっしょにいるのでしょう。私たちの家。そこでみんなそろうのですね。むかしのように。

口に入れた指先には壁の泥がついていて舌を刺激した。それは快いものではなかったが、舌に力を入れて異物を唇の外に吐き出すうちに、舌のつけ根のあたりから思いがけなく多量の唾液がひろがっていた。右手は、先ほど壁を探って汚れていたのだ。そのことに気付いたが、節子はやはり右手の人さし指を舐めるのをやめなかった。左手は舐めるわけにはいかなかった。左手がしっかりと持っている小型のノートを、たとえ一瞬でも、節子は手放したくなかったのである。節子は自分が間もなく死ぬであろうことを知っていた。そのとき、節子はそのノートを胸に抱きしめて死にたかった。死はいつやってくるのか、その時を知ることはできない。だから節子は、片時もそのノートを手放したくなかったのである。あたりが暗いのは確かなことであったが、本当は明るかったにしろ、私にはくらやみと同じなのではないだろうか、と節子は疑っていた。節子の視力がすでに失われていたとしても、少しも不思議ではないのだ。八月の末のある日、あの夕方、美しい夕焼空の下で、水道の流れる水に熱い頬を打たせて心ゆくまで水を飲み、水筒に水を満し、ほとんど這うようにして壕舎のしめったかびくさい夜具の上に身体を横たえて以来、いったいどの位の

時が過ぎたのか、節子はまるでわからなかった。いく度か目覚め、渇いた咽喉をうるおし、水筒はいつか空っぽに乾いてしまっていたが、あの夕焼けの明るさ以来、光を見ることはなかったのだ。私が目覚めるときはいつも夜だ、と節子は思っているのだったが、本当は私の目はもう見えないのだと考えるべきなのかもしれないのだった。

しかし、真暗闇に身動きもせず、じっと横たわっている身にとって、眼が見えるということにどんな意味があるだろう。節子はしずかに眼を閉じてみる。そうすると現実にはすでに見ることのできないはずの映像が、そこに実在するのだった。それが花ならば甘い香りを放ち、手をさしのべるまでもなく、つややかなつめたい花びらの感触までたちまちよみがえった。それが人ならば、節子の十六年の生涯のすべての時間をとおしてのその人間の姿を、瞬時に再現してしまう。機関車にとりつかれた肇のキャラメルのべんけいごう以来、ブリキを使ってラッカー仕上げをした精巧なジーゼル車に至るまで、それらが全部つながって、長い長い貨車のように、果しない線路の上を、ゴトゴトと通り過ぎて行くのであった。その機関車の長い列を見送る肇は、黒い学生服の肩から胸に寄せ書きの日章旗を十文字にかけていた。そしてその肇が、次の瞬間、列車のデッキに半身を乗り出して手を振りながら、ずんずんと遠ざかって行くのであった。少し照れくさそうに。真白な歯で笑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いながら。節子は、その前夜、おそくなってから虫歯が痛むといって母に今治水をつけてもらっている兄を見ていた。大きな身体の兄が幼い子どものように大きな口を開けて、小柄な母の前にぺたんと坐りこみ、そこじゃないってば、もっと奥だよォ、とくぐもり声でいっているのを見て、おかしさがこみ上げてきて困ったのである。余り笑い過ぎて涙があふれ、その涙がいつか悲しみの涙と変ったのであった。あの時、肇の虫歯はもう痛むことはなかったのだろうか。節子は肇の出征のときを思い出すたびに、真白な歯をみせて笑っていても、きっと虫歯は痛みつづけていたのにちがいないと思うのだった。

今度、表記の場所に移りました。元気でやっています。そちらもお元気で。

肇から前後三度だけ来た移転通知のような葉書を、家族めいめいが一枚ずつ持っていた。肇は出征の時も内心の決意のようなものは何一つ洩らさずにあっさりと出て行き、出征してからの便りにも、心の内を語る言葉はまるでなかった。母は葉書の四分の一にみたない几帳面な四角い文字の列をみて、溜息をついていったのだった、もったいないねえ。こんなに余して。

大泉、お前はいいよ。自分のやりたいようにやれるもんな。
お前だって、別に、誰に気兼ねしてるってわけでもないだろう。
俺はお前みたいに単純じゃないさ。俺の兄貴たちはどっちも極端だからな。ああいう先輩をみてると、全く去就に迷うぜ。
お前が迷ってるとは思えないがね。
顔で笑って、心で泣いてだ。子どもの時は迷わず幼年学校に行くつもりでいたんだ。上の兄貴が刑務所に入ってから、近所のガキ大将にスパイの弟とかいって、大分やられたからね。それが口惜しくて今にみてろ、陸軍大将になってやる、というようなもんだった。ところが下の兄貴が突然軍人になるっていい出した。家中みんな下の兄貴はピアニスト志望だとばかり思いこんでいたのにどうしても軍人になるってきかないんだ。軍人になるっていったって実際問題として、上の兄貴のことがあるから、陸士だって海兵だって入れるわけはないんだ。結局中学も中退で、海軍飛行予科練習生というのになって、一人前に飛べるようになるかならないうちにもう戦死さ。おい大泉、お前聞いてるのか。
ああ、聞いているよ。
支那事変のはじめの頃、渡洋爆撃で沸き立っていた頃の話だ。上の兄貴の事件では町内

の鼻つまみでろくに挨拶もしてもらえなかったのが、今度は名誉の戦死者の遺家族の家だからね。俺は中学に入ったばかりで、本当のことは何もわからなかったんだが、実に厭な感じがした。そのうち下の兄貴の遺書が届いた。遺書っていうのも変だが、手書きの楽譜で、ショパンのポロネーズと、シューマンの子供の情景の中の一部分だった。おふくろが泣きながら弾いているのを聞いていて、俺は思ったんだ。下の兄貴は上の兄貴をかばって飛行兵になったんだな、戦死っていったって自殺みたいなものだったんだなってね。ポロネーズは上の兄貴の好きな曲で、下の兄貴はしょっちゅう上の兄貴のために弾いてやっていた。シューマンは昔、おふくろがよく弾いていて、子供達が何となくぞろぞろピアノ室に集って聞いていたものだった。その時以来、俺は自分の道を見失ったのさ。

しかし、今度志願しようって言い出したのは、お前の方だぜ。

うん。しかし、そのことと俺が迷ってることとは矛盾しないよ。

矛盾してるよ。

迷ってるっていうより、決心がつかないんだ。

同じことじゃないか。

決心がつかないから、お前を誘ったんだ。テコを応用すれば力がなくても物は動く。

俺はテコか。

まあな。

訓練の警戒警報が出ていて、電灯には黒い被いがかけてあった。こたつはおとうさんのために作ったんだからね。念を押して、母は隣組の常会に出かけていった。まだこたつの欲しいような気候ではなかったが、母は寒がりの父が残業を了えて帰ってきたとき、留守にしているのが気がかりなのであった。そして、その父はまだ戻らない。節子は、こたつに足の先だけ入れてうたたねをしていた。肇と肇の親友の湧井修三が、反対側に寝そべって話していた。節子は目が覚めても、眠ったふりをつづけた。六歳年上の兄は、今では、節子にとって異人種のようなへだたりがあった。兄たちが何を、どのように考えているのか、仲間に入って知ることは不可能だった。好奇心に光る眼をまぶたの下でくるくるさせて、節子は小さな寝息をたてつづけた。

上の兄貴が非国民ということになって、それに刺激されて陸士に行こうと考えたのは、下の兄貴の自殺行為と同じじゃないかと思い始めたら、もう駄目なんだ。陸士、陸士ってさわいでいたのが、いつの間にか理専に変っちゃったんで、家じゃまたまたびっくり仰天さ。もっとも、最後に残ったいたずら息子が跡とりになりそうな具合になって、おやじも

おふくろも喜んだことは喜んだんだ。下の兄貴みたいに、死ぬためにだけ軍人になるのはいやだった。なんて、本当の理由は何も知らなかったから。

それが本当なら、お前、志願するのは止めた方がいいんじゃないのか。俺たち理工科の学生には、まだ徴兵猶予の恩典もあることだし、ちゃんと学校を出て、将来は、おやじさんの会社を継ぐことにだって、それなりに意義があるんじゃないのか。

将来ね。そんなもの、あるのかな。

どうしてそんなこというんだ。

いくら形は名誉の戦死だって、自殺するみたいに死ぬためにだけ、軍人になるのはいやだったから、俺は陸士をあきらめたんだ。しかし、最近、考え方が変ってきた。

どんなふうに。

大泉。お前、ガダルカナルの転進というのは、どういうことだか、考えてみたか。アッツ島の玉砕というのは、どういうことだか、考えてみたか。

……。

俺の考えでは、要するに日本軍が敗けているということなんだな。とすれば、死ぬのなら早い方がいいんじゃないか。否応なしに死ぬのなら、お国のためだと思って死ねた方が

トクなんじゃないか、と考え始めたんだ。

お前、何がいいたいんだ。

俺、この夏、上の兄貴に逢ってきたんだ。上の兄貴とは年も離れているし、頭の出来も大分違うんで、今まで話をしたことなんかなかったんだけど、何だか、一度どうしても逢って話を聞きたいと思い出したら、我慢ができなくなってね。

病気だそうだけど、どんななんだい。

まあ、なおるってわけにはいかないだろうな。あと、何年位生きのびるか、ってことだろう。

たしか、転向して、保釈になったんだったね。

転向っていったって、いろいろあるんだよ。兄貴のは、形の上だけなんだ。今度逢って、いろいろ話してわかったんだけど考え方を改めたことなんて、一度もないっていうんだ。刑務所で喀血して、これで転向しても戦争に協力しないで済むと思ったから、転向したに過ぎないんだって。兄貴たちの仲間で転向したやつは、ほとんど兵隊になって外地に連れて行かれたらしいよ。

兄さんは、今でも、戦争に協力しないっていってるのか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com